

IV 地域資源グループの調査・研究活動とその成果
(1) 国際シンポジウム「暮らしと自然と文化的景観」報告

丸谷 耕太

全体スケジュール：2017年8月25-27日

8月25日（金） エクスカーション：能登視察

8月26日（土） エクスカーション：金沢視察

8月27日（日） 国際シンポジウム

シンポジウム開催概要

日時：8月27日（日）9:30～16:15（9:00開場）

場所：金沢市文化ホール3階 大会議室（金沢市高岡町15番1号）

開催趣旨：

金沢は人口46万人の中核市でありながら、自然と文化に恵まれた都市です。金沢やその近郊へ国内外からの多くの観光客が集まるようになった昨今の状況を踏まえ、生物多様性と文化多様性のつながりを考えながら「文化的景観」をキーワードに人の生活と自然の営みが両立できる持続的な都市の未来を考えたいと思います。世界農業遺産にも指定され、里山里海に代表される豊かな自然を保全活用する能登での取り組みや、創造都市として継承してきた文化を味解する金沢での取り組みなど、現在でも関連する活動は数多く展開されています。今回のシンポジウムでは、研究者の研究報告や活動している方の実践報告とともに、金沢や能登における視察を踏まえた多角的な視点からの議論を行い、人や自然の営みや活動と風土を表象する「文化的景観」として地域の価値を再評価したいと思います。そして、今後の都市のあり方や支援に必要な指針あるいは施策、そして学際的なアプローチが果たしうる役割を考えます。

主催：金沢大学 地域政策研究センター

共催：国連大学サステイナビリティ高等研究所

いしかわ・かなざわオペレーティング・ユニット

エコロジカル・デモクラシー財団

金沢大学 能登里山里海研究部門（珠洲市）

1. エクスカーション

8月27日（日）のシンポジウムに先駆けて、シンポジウムの登壇者を中心メンバーとして、25日と26日の2日間に金沢・能登の視察を行った。今回企画したシンポジウムは文化的景観をテーマにしている。そのため、事前に金沢や能登の文化や自然、そして広がる風景について経験を共有し、話し合いを行うことで、シンポジウムの内容を充実させることを目的としてエクスカーションを実施した。エクスカーションにおける訪問先は図1の通りである。

8月25日（1日目） 能登（輪島市）
輪島土蔵文化研究会：水野 雅男 氏 能登半島地震により損壊した土蔵の保全活用及び職人の育成や拠点創出を行う。
金蔵集落：石崎 英純 氏 中世から遺されてきた寺や棚田の風景、自然、伝統文化などを保全活用した集落の活性化を進めている。
まるやま組：萩の ゆき 氏 里山「まるやま」で自然・地域の伝統的な暮らしの知恵より、日常の暮らしと里山をつなぐ活動を行っている。
8月26日（2日目） 金沢市
金沢クリエイティブツーリズム：NPO 法人 金沢クリエイティブツーリズム推進機構 市内のアーティストやアトリエ、町家、茶室など文化的なスポットを巡る創造的観光を推進している。
心蓮社：ファン・パストール・イヴァールス 氏 金沢の卯辰山山麓寺院群の北端にある寺。市指定文化財で江戸時代初期に作庭された日本庭園がある。
復活凹市：復活窪市実行委員会 金沢の市場発祥の地である久保市乙剣宮で、市の賑わいを復活させることを目指して開催されるイベント。

【図1：エクスカーションの訪問先】

25日は能登の輪島市を訪れた。はじめに土蔵の保全活用の現場を視察し、「輪島土蔵文化研究会」の取り組みや現在の課題等について話を伺った。次に、金蔵集落へ移動した。当日の朝に集落でとれた食材を用いた弁当を頂き、お寺や水田が並ぶ集落を散策した後に、集落の活性化に取り組むNPO 金蔵学校の活動、地元で活動している生物調査について話を聞いた。最後に、輪島市三井にある里山「まるやま」を舞台に活動を行っている「まるやま組」を訪れた。そこでは、自然・地域の伝統的な暮らしの知恵により日常の暮らしと里山をつなぐ活動を紹介して頂き、文化や自然を理解するためにデザインされたツール、商品を見せてもらった。

26日は金沢市内を視察した。はじめに、NPO 金沢クリエイティブツーリズム推進機構により実施されている「金沢クリエイティブツーリズム」のツアーに参加した。このツアー

では、土蔵や銀行を改修したギャラリー、アートをテーマにしたゲストハウス、九谷焼作家の自邸兼アトリエなどを歩いてめぐり、作家やオーナーから制作の内容や金沢で活動する理由や街に対する思いを伺った。次に、卯辰山山麓の寺院群に立地する「心蓮社」を訪れた。「心蓮社」は市指定文化財にもなっている日本庭園があり、国連大学サステイナビリティ高等研究所いしかわ・かなざわオペレーティング・ユニット（以下、OUIK）が中心となって、この場所で生物文化多様性を学ぶワークショップが開催されている。庭を見ながら昼食をとり、住職と OUIK のフアン氏から寺の歴史、庭の特徴についての説明を受け、人の生活と自然について議論を行った。最後に、金沢の久保市乙剣宮で行われていたイベント「復活凹市」を訪れた。この場所は金沢における市場発祥の地ともされ、地元の商店と NPO 趣都金澤による実行委員によって、地域の賑わいを取り戻すためにお祭りが開催されている。

2日間のエクスカージョンでは、文化と自然をともに考えながら新たな風景をつくる活動としていくつかを視察した。視察中は、財団法人エコロジカル・デモクラシー財団および東京工業大学の学生の協力のものと、文化-自然-ランドスケープの連環をより意識し、思考を巡らせるための道具として「エコデモ発見シート」というツールを用いて行った。下記のシートを各人が手にし、視察先ごとに気づいたことや感じたこと、説明を受けて分かったことなどを文化多様性・ランドスケープ・生物多様性の欄に記入し、そこに存在する連環を考えた。これらの結果を視察先ごとにまとめ、27日に開催されたシンポジウムのディスカッション時に、エクスカージョンのまとめとして提示した。

2. シンポジウム「暮らしと自然と文化的景観」

2. 1. シンポジウムのプログラム

シンポジウムでは、招待講演として、ワシントン大学准教授の Kenneth Peter Yocom 氏、ボローニャ大学准教授の Valentina Orioli 氏、東京工業大学准教授の土肥真人氏の3名を招聘し、講演していただいた。また、それぞれを3つのセッションに分け、富山大学准教授の奥敬一氏、まるやま組の萩のゆき氏、OUIK の Juan Pastor Ivars 氏、金沢大学助教の丸谷耕太氏、金沢大学特任助教の Mammadova Aida 氏の計5名から研究発表を行っていた。最後には、同志社大学教授の佐々木雅幸氏に全体の総括を行っていただいた。全体のプログラムを以下に示し、以降講演の内容を紹介する。

【シンポジウム プログラム】

9:00 開場 (Symposium Registration)

9:30 開会挨拶・趣旨説明 (Opening Address) : 佐無田光

<Session 1> 自然の中の暮らしと景観 / Livelihoods and Landscapes in Nature

09:40 - 10:10 招待講演 1 (Guest Speech 1) : Kenneth Peter Yocom

10:10 - 10:30 研究発表 1 (Presentation 1) : 奥敬一

10:30 - 10:45 研究発表 2 (Presentation 3) : 萩のゆき

10:45 - 10:50 まとめ : Kenneth Peter Yocom

<Session 2> 暮らしの文化と景観 / The Culture and Landscapes of Livelihoods

11:00 - 11:30 招待講演 2 (Guest Speech 2) : Valentina Orioli

11:30 - 11:45 研究発表 3 (Presentation 4) : Juan Pastor Ivars

11:45 - 12:00 研究発表 4 (Presentation 5) : 丸谷耕太

12:00 - 12:05 まとめ : Valentina Orioli

<Session 3> 金沢・石川における自然と文化 / Nature and Culture in Kanazawa and

Ishikawa

13:15 - 13:30 研究発表 5 (Presentation 2) : Mammadova Aida

13:30 - 14:00 招待講演 3 (Guest Speech 3) : 土肥真人

14:00 - 14:05 まとめ : 土肥真人

<Discussions>

14:15 - 16:00 ディスカッション (Discussion)

16:00 - 16:15 総括 (Concluding Remarks) : 佐々木雅幸

16:15 閉会 (Closing Remarks) : 市原あかね

(敬称略)

2. 2. シンポジウム講演内容

<Session 1> 自然の中の暮らしと景観

Livelihoods and Landscapes in Nature

招待講演 1

「The LIVING City: Systems and Infrastructures for Biocultural Diversity」

Ken P. Yocom (ワシントン大学 准教授)

1. 複雑な世界におけるデザイン-エコロジカル・デザインと計画

私は2012年に「エコロジカル・デザイン」という本を出版しました。その中で重要な部分は「システムの能力を拡張する明白な試みに携わる」ということです。エコロジカル・デザインの概念は現在におけるダイナミクスと過去の遺産を理解し、将来を推測することなのです。

チョンゲチョン（清溪川）の復元プロジェクトは、ソウル都心部にある文化的歴史的に重要な川の姿を取り戻すもので、約6kmにわたり高速道路システム全体が取り外されました。これにより、都市中心部の生物多様性の増加と気温の低下という点で多くの効果が生じています。市街地の公共交通機関の利用者数にも影響を及ぼし、長期的にはこのエリアに接する土地利用を多様化させました。しかし、高速道路がなくなり端に住む多くの人々が他の場所に移動しなければならなかったという欠点もあります。また、元の川の流れは、暗渠化によりまちの下を流れる都市排水のために失われてしまいました。

シアトルのマグナソンパークの湿地はワシントン湖に囲まれた公園ですが、以前軍用飛行場でした。公的所有に転換されたとき、コミュニティの利益を特定して優先順位を付けることが大きな課題となりました。生態学的観点から見て重要な点の1つは湿地の開発です。完成以来、地元の生物多様性に利益をもたらし、植物、鳥、そして地域内で絶滅の危機にさらされているパシフィック・コーラス・フロッグが増加しました。また周辺の水質改善も見られました。この公園の課題は、敷地全体に散在している古い飛行場の汚染土壌などを含め、たくさんあります。財政的圧力のために汚染に直接対処するのではなく、デザインはそれらの領域を避けるように制約されていました。

これらの例は、エコロジカル・デザインとその終点を理解する上で重要であり、生物文化多様性を理解する上での土台であると考えます。持続的なプロジェクトに必要なすべての基準を満たすデザインはほぼ皆無ですが、エコシステムを効果的に再開する多様な戦略を通じて、敷地の状態と利用者の健康を改善できるデザインが多いということです。

デザインとは、価値をもたらし、それらの場所をプロセスとして理解し、そのプロセス内で取り組むことです。私が最も重要だと考えるのは、場所、時間、文化の違いをポジティブな価値として扱うことです。私は、問題の解決策を探索する「問題ベースのデザイン」よりも「機会ベースのデザイン」として捉えることを好みます。そして、自身のデザインの経験を通じて加えた項目は「諦めない」ということです。米国の規制の中では、成果を上げるのに本当に長い時間を要します。

2. 都市へのスケーリング：エコロジカル・シティ vs. エコロジカル・メトロポリス

次に都市に合わせた拡張について論じます。エコロジカル・シティとは、都市を一つの要素として理解します。都市をモノとして見るのではなく、文脈の中で重なり合うプロセスの集合体として捉えます。したがって、環境、人、規制構造がどのように連携して都市に関わりあうかを探求します。エコロジカル・メトロポリスは都市の機能的統合に重点を置きます。

アブダビのマスダール・シティでは2006年にエネルギー資源と輸送から完全に独立した都市をつくる構想が開始されました。周辺環境と切り離されたひとつの空間に包まれた都市というエコロジカル・シティの概念です。段階的に計画が前進するため、最終的な約6平方キロメートルのうち現在までに約0.5平方キロメートルが建設されました。

対照的なのは中国の天津市です。都市中心部を有毒な荒地の上に建築し、中国内の様々な都市生活の様式を再統合することがコンセプトです。つまり、都市生活空間と都市労働空間を、人が水と接するより自然な空間に統合するために空間を再分配しています。エコシティ・コンポーネントとグリーン・リビング・コンポーネントは、水や排水の流れ、そしてそれがメトロポリス地域の中でどのように動作するかを考慮しながら、エネルギーの流れ、輸送システムを概念的に捉えています。

3. 特性：都市の生物文化多様性

プロジェクトを詳細に考える時、私たちは都市構造と生き物の生態系の特性を探求し始めます。私はこれらの特性をシアトルの文脈の中に置きます。シアトルは都市生活、社会的平等、環境についての理想とアプローチにおいてとても進歩的な都市です。

コミュニティー・ベースの経済発展とは、複数のコミュニティーが共通の経済問題の解決策を生み出すプロセスです。パイクプレイスマーケットは住民と観光客ともに人気がある場所で、ダウンタウンの中心でありウォーターフロントを見渡す重要な場所です。1960年代に市はマーケットを閉鎖してこの敷地を再開発することを模索していました。複数の著名なコミュニティー活動家を中心に市民が抵抗し、マーケットの保全に成功しました。その

一環として、効果的かつ地域的な経済発展を促進するトップダウンの組織とボトムアップのアクションとの多様な関係があります。様々な個々のコミュニティと協力して、人々に権限を与え、人々を採用し配置する方法がとられます。

ほとんどの大都市圏には、現在確立されたリサイクルプログラムがあります。都市が生み出す廃棄物の行き先や処理の方法を理解することは、問題ではなく資源と見ることができ、エネルギー源の変更について、太陽エネルギーや再生可能エネルギーへの変更や技術や材料のリサイクルは一般に見過ごされがちです。

バイオリージョナリズムとは、その地域を構成する主な種が住む生物学的領域という概念です。シアトルにおけるカスカディア（カスケード山脈の領域）を生物学的領域として研究し理解することで、損傷した都市システムの修復方法を検討します。サーモンはその領域の主要な種ですが、他の種のほとんどはサーモンのライフサイクルに影響を受けています。シアトル市は、地域のサーモンの生息地を更生することによって、サーモンの集団を再確立する努力をしています。もう一つの非常に重要な要素は教育で、次世代や若者の支援をすることです。周囲に何があるかを認識し、都市の中だけではなくより大きな文脈の中で生活していることを認識するように子供たちを教育することです。

健康なコミュニティの基本的要素は、平和、住まい、教育、食糧、収入、安定したエコシステム、持続可能な資源、社会正義、公平性です。健全なコミュニティとは、再開発によってこれらの異なる特性を地域社会とつなげることです。もう一つは、コミュニティ・ベースの農業計画です。コミュニティ・ガーデンは、シアトルのいたるところに存在します。このプログラムは人々を家から外に誘い出し、土壌を成長させ、土壌を改善する方法を特定します。

もう一つの特性は適正な技術の使用で、技術とデザイン思考の最先端にいないとできないということです。持続的発展のためには最新技術を効果的に理解、開発、実装、活用する能力が必要です。ブリットセンターという建物は都市資源からまったく独立しており、すべての電気を生成し、使用する水を集め、使用した水を浄化します。すべてのシステムとそれを構築するために使用されたすべての材料は、シアトル周辺の地域から持ち込まれました。これを理解するために建物のライフサイクルを考えます。材料の産地や材料の持続期間、再利用の方法はどうなっているのでしょうか？水はどのように集められ、使われ、処理されているのでしょうか？この建物で使用されているエネルギーはすべてその中で作られます。重要な点は、建物内で働く占有者の積極的な運営管理への参加です。建物は時間の経過とともに維持される必要があるのです。適切な技術の例はリサイクルに関連することですが、シアトル市には、家庭から有機材料を採取するコンポストプログラムがあります。市はそれを収集し、それを民間組織に販売します。民間組織は、有機材料をコン

ポスト化して土壌にし、それをコミュニティに売り戻すのです。適切な技術とか最先端とは、地域社会の中で機能しているかという点も重要なのです。

持続的な都市開発とは、地域社会や生態学的ニーズを支えるインフラストラクチャの強化です。この例はレイン・ガーデンです。世界のほとんどの都市部は、レイン・ガーデンを考慮しています。もう一つの非常に重要な要素は歴史的保存です。必ずしも昔の姿を保存するということではなく、今日のニーズを満たしつつ、昔の姿の特徴や、その意図するところを保存することが重要なのです。そして最後は、非車両交通を促進するためのシステムの分析と開発、つまり、列車システム、歩行者システム、自転車システムがその中心です。

社会的平等は非常に重要な特性です。さまざまなエコロジーとシステムを支援することは、多くの点で私たち自身とその生活の促進に役立っているのです。人々が意見を述べる場所を提供し、人々にニーズを明確にしてもらう必要があります。財政的手段のより少ない人々はシアトル市内に住む余裕がありません。したがって、市は積極的により包括的な地域づくりのためのさまざまな方法と機会を探求し、すべての人々を巻き込む開発を行っています。社会的平等の一環として、人口のより生産的なセクターや構成要素を考えるだけでなく、子供や老人の健康を育み、社会正義の機会を創造し、皆のために機会を創造し改善することを考えます。

これらの異なる特性はすべて、生物文化多様性を創造します。それらはより生物多様性のある都市を作るためにうまく取り組んでいます。決して完璧ではありません。生物文化多様性とは何を意味するのかをより深く理解するために、引き続き取り組む必要があります。この対話には決して終点がありません。都市を理解し、場所を理解し、コミュニティを理解することです。ダイナミックで常に変化しています。それが、私たちがここで考えているものの中核的な原則です。

研究発表1 「景観をどのように理解するか」

奥敬一（富山大学 准教授）

1. 文化的景観を説明することの難しさ

「文化的景観」の捉え方の難しさに対して、奈良文化財研究所の文化的景観額研究会では文化的景観の伝え方や学問の在り方を議論してきました。文化的景観を説明することの難しさの一つに、見た目を凍結的に保存することが目的ではないということがあり、その地域に住んでいる人々の生活と共にありますから、生活をずっと過去の状態で変えずに残

すことはできません。昔のものをそのまま残すのではなく、現代の社会状況、生活状況に応じて変わっていくという性質があります。どこは変わっていいのか、どこは変えてはいけないのか、を理解することが非常に難しいのです。景観に関する政策や施策では装飾物を使って修景する事業が非常に多くありますが、大事なのは「動態保全」であり、実際にその生活を続けながら残していく、そして実際に使われている物をそのまま使いながら残していくことがポイントになります。このように捉えれば、将来に残したい地域の価値や風景の「見方」、地域の共通認識のもと文化的景観というキーワードにまちづくりに活かす「味方」となるのです。

2. 風土と営みの現れ

一つ目のポイントは、文化的景観は風土と営みの現れなのだという事です。その地域ごとの風土、つまり自然だけではなく、自然と、その自然の中で育まれてきたさまざまな文化が融合したものということになります。文化的景観は、その風土の中で育まれてきた生活の営みが表現された形です。それをいかにうまく伝えるかが大事な事です。そして、その地域ごとの風土と営みの中で、地域の人々はごく当たり前前に生活を続けてきていたのですが、その中に「風土との折り合いの付け方」が存在します。そういうものが、文化的景観として表面に表れてくるものなのです。

3. 「地域らしさ」への気付き

二つ目のポイントは、「地域らしさ」への気付きということです。「地域らしさ」をうまく伝えていくことが、すなわち文化的景観を継承していくことにつながるという考え方で、「地域らしさ」とは、しかるべきものが、しかるべき在り方で、しかるべきところにある状態と言っていますが、その地域を象徴する、その地域だということが明確になるような形や景観を大事にしていくということを、もう一つのポイントとして挙げています。この「地域らしさ」をいかに読み取っていくのかが、地域の人たちに文化的景観を理解してもらうための大事なポイントになります。

4. 自然基盤と向き合う

三つ目のポイントは、自然基盤といかに向き合うのかということです。フランス語にテロワールという言葉があります。ワインの生産地で使われている言葉ですが、ワイン畑の区画ごとに、地質、土地の傾斜、土質、微気候といったものが全て少しずつ違います。それらがブドウの個性を生み出し、さらにワインに個性を与え、価値につながっていくのです。この考え方は、日本の文化的景観にも当てはまります。自然の基盤がその地域ごとに、

一つ一つの個性を与えているのです。長い時間をかけて、自然を最大限に生かす働きかけが積み重ねられたことによって、その「地域らしさ」がまさに形づくられていると言えるでしょう。

5. 「しっくり感」の尊重

四つ目のポイントとして、「しっくり感」の尊重を提案をしています。「地域らしさ」を語るときに、違和感のない状態を表現する言葉として、「しっくり感」「しっくりくる」という言葉が重要なのではないかということです。地域の人々の目には非常になじんだ形や素材を使ったさまざまなしつらえを、一つ一つ掘り上げていって重視してあげることもポイントであろうということです。そのときに、どうしてもわれわれ研究者は学術的な言葉で表現してしまいがちなのですが、恐らく地元の人々はそれとは違う、地元で通用する言葉を使っているのだと思います。専門家の学術的な用語だけではなく、地元の人々の言葉でそうしたものを表現してあげることも、文化的景観を成り立たせていく上では、非常に重要なことなのだろうと考えています。

6. 地域づくりの視点；何を継承するのか？

最後に、地域づくりの視点です。文化的景観という言葉で一体何を継承するのかということが、もう一つ大事なポイントです。これまでお話ししてきたような、景観をつくり出している地域のシステム（自然であり、風土であり、地域の生活文化）を丁寧に読み解くことによって、その地域がどうやって持続してきたのか、その柱を見いだす作業が重要です。

この持続性の柱を見いだすことによって、現在動いている文化的景観のシステムを継承するイメージを、地域住民全体で共有することにつなげていっていただきたいということです。そこでは、文化的景観をどう地域づくりや地域の計画につないでいくかという、プランニングマインドが求められます。そのあたりは、恐らく行政や研究者の役目にもなってくるわけですが、何を継承するのか、それによって一体どういう町、地域をつくっていくのか、そのような将来像も併せて考えていくことが非常に重要になります。

そういう考え方を基に、必ずしも全て、形だけを凍結的に昔のままに保存するのではなく、将来に向けて考え方をアップデートできるような施設、あるいはそういう教育の在り方も、文化的景観の柱として用意しておくことが、これからの文化的景観の保全、そしてそこから生まれてくるまちづくりに必要とされることなのではないかと考えています。

研究発表2 「景観をどのように理解するか」

萩のゆき（まるやま組）

1. 能登とはどのようなところか

私は輪島市から来ました。輪島市は、能登半島の真ん中に位置しています。私たち家族は14年前に能登の里山に移住してきて、自宅を学びの場として住み開いて、「まるやま組」というものを行っています。三井町市ノ坂は世帯数75軒、人口200人足らずの小さな集落です。家の後ろに、まるやまと呼ばれている、コナラの小さな小山があります。そこは、昔は薪や炭に使われていた集落の共有地だったそうです。その周りに、水田やアテの木やスギの木、広葉樹の森が広がる典型的な能登の里山です。昭和30年代には本州最後のトキが営巣していて、今でも豊かな生物多様性と、伝統的な集落の人たちの営みが息づいている、日本の伝統的な原風景といわれるようなところですよ。

私たちは夫婦二人とも、1960年代の東京生まれで高度経済成長期に生まれ育ちました。建築家である夫が留学したため、アメリカのフィラデルフィアで暮らしました。初めはアメリカの合理的な消費型のライフスタイルや自由な気風に漬かって、日本のことなど意識もせず楽しく暮らしていました。しかし、海外に出てから、私たちにとってアイデンティティとは何かを考えるようになりました。たまたま仕事で能登を初めて訪れたのですが、自然と共に人の一生があることに驚きました。日本からアメリカに行ったときよりも、大きなカルチャーショックを受けました。この100年ぐらいの時間をかけて、私たちがどこかに置き忘れてきたようなものがたくさんあるところ、それが能登だと思っています。

2. 住むということ

ある日、家の窓から、集落のおばあちゃんが刈り取った枝を背負って歩いていく姿が見えました。そのとき初めて、代々ここの村の人たちが休まず自然と関わってきたことによって、この美しい里山の風景つくられたものだと分かりました。私たちのように集落の外で都会の仕事をしてお金をもらって暮らしているというのは、里山のいいところだけを取って消費しているに過ぎず、この大いなる里山を維持するサイクルに絡んでいないことに気が付きました。

ここに住むというのは土地に根差した暮らしをすることであり、山や田んぼや水に責任を持ちながら手入れをする。その一方で、自然は恵みを与えてくれて、暮らしを紡ぎ出すことができる。自分の土地を越えて、集落全体が自分の家の庭のように体で感じて、お互いさまと心で気に掛け合いながら生きていくことでした。

私たちは住み開きしながら、様々なバックグラウンドの人々と、持続可能な暮らしを学び合うことにしました。おばあちゃんたちは、田んぼや山の行き帰りなどに、いろいろな自然の恵みをチェックしながら、いつも歩いているのです。そして、手入れをしながら必要なものを必要な分だけ、過不足なく手に入れます。次の世代に残すために取り尽くしてはいけないということで、自然から、何を、いつ、どのように恵みとして利用してきているのかを、10年ほど見て聞いてきました。聞いたらすぐやる、「聞きやり」というものをして、ながらまねをして、覚えていきました。

3. アエノコトと地域に根差した学び

アエノコトという田んぼの神さまをお祭りするときの食べ物などのしつらえが、ここにあります。田んぼの神さまにささげている食べ物やしつらえ、食器、祈りのための道具が、いつ、どのように、どんな人が準備して、ここに集まってきているのかということを示しています。バックグラウンドのグラデーションは、この土地との距離を表しています。このように示すと、アエノコトのしつらえが、しっかり大地に根を下ろした植物のように見えてきます。これは、地産地消やフードマイレージ、トレーサビリティなど、都市の経済や環境を支える、表層的な価値だけではなく、祭りの神にささげる食べ物の中に、人と自然は切っても切れない関わりがあり、人間も自然の一部なのだという、深い日本独特の自然観を洗い出しているように思います。

近代化に伴う農法の変化や農薬の使用とグローバル化によって、日本の伝統的な農村の景観は失われていっています。まるやまでも変化のあるものがたくさんあるのですが、今なら、まだこういうことを知っている人たちに聞いて、私は試すことができます。彼らが元気なうちに、その土地に根差した学びの場がとても必要だと思って、活動を開始しています。

伝統的な農耕儀礼アエノコトは、農家が田の神様に、豊作の祈願や収穫への感謝をするお祭りです。生産者と消費者という垣根を越えて、伝統行事を現代的に解釈した、まるやま組流のアエノコトを行っています。お米を食べている人は誰でも田んぼの生き物に感謝をしてもいい日、それがまるやま組のアエノコトです。伝統と科学が出会い、私たちの里山の暮らしは豊かさを増しています。この取り組みは、「国連生物多様性の10年日本委員会」の「生物多様性アクション大賞」を受賞しました。

このような活動の成果として、地域に根差したことを地域が目線で伝える一つの形になったり、さまざまな異業種の方、いろいろな立場の人が寄り添ってみることから、いろいろなことが生まれています。生き物調査をはじめ、自分の田んぼの生き物を説明できるようになった農家さんや、地元食材で飲食店をはじめた主婦の方、東京の農大生がマルシェ

で売っていて、その後移住して来てしまったとか、いろいろなアクションが始まっています。

とはいえ、いろいろな組織と、どのようにコンセンサスを得ながら活動をしていくとか、それから身近な金沢と能登というような関係を、どうやってつないでいったらいいだろうか。また、それを続けるためには、いろいろなソーシャルビジネスへの取り組みなども必要になってくるのではないかと考えています。

まとめ

Ken P. Yocom (ワシントン大学 准教授)

奥さんが「動的保存」ということについて話された時にもおっしゃっていましたが、このセクションの要素のひとつ、または当シンポジウム全体の中でのこのセッションで提示されたアイディアは、文化と景観について理解する時にはこれらの場所を生きている場所として、常に変化する場所として理解しなければいけないということです。生態学は様々な方向に変化する中で、どのように仕事や地域社会や活動の中で従事したら良いのか？このようなタイプの仕事でのデザインの要素のひとつは、最も適切だと思う方向を導く助けとなることです。しかし、地域社会と協力し、あなたが住む地域のコミュニティを理解することは絶対に重要です。

萩のさんは、人々が自然の一部であることについてお話しされました。これは私の出身地の文脈とは非常に異なる文脈です。西洋の視点では何百年もの間、自然こそが、人々とは別個なものでした。私は、これが日本の文化の中核となる基盤で、景観の中でのダイナミクスを認識する助けになり、見方を変えていく中での自分の役割を認識する助けになるものだと思います。ここで私は一歩進んで、人々が自然の一部であるならば、人間が作った街もまた自然ということなのであろうか、そして、どのようにして街を自然として考えるのか、どのようにして街を自然の定義の一部になる要素と考えるのか、という問いかけをしたいと思います。

それから他にここで言及しておきたいことは、奥さんの話にもありましたが、景観について考えるとき、私たちがどこで仕事をして、どこに住んでいても、そこに住む人々は本質的にその地域、その場所の人だと私は思っています。したがって、その地域の文脈、材料、人々のアイデアから構築することは、私たちにできる最も重要な作業の一部です。

もう一つ再度触れたいことは、自分自身を制約に縛り付けたり問題を解決しようとするのではなく、どのようにして制約の裏側を見て、機会を理解するかということです。どの

ようにしたら、制約ではなく機会の上に構築できるでしょうか？我々は、新しいものをどのような違った見方をする、別の視点で見る手助けを、私たちが引き止めているものを異なる視点でみて、新しいものを見られるようにするにはどうすれば良いか。それがまさにまるやまで起こっていることだと思います。まるやま組の例は、その点で真に焦点を当てているコミュニティの素晴らしい例です。

<Session 2> 暮らしの文化と景観

The Culture and Landscapes of Livelihoods

招待講演 2

「The Cultural Landscape of Bologna between Conservation and Valorisation」

Valentina Orioli (ボローニャ大学 准教授)

1. イタリアにおける文化的景観の概念についての考察

ボローニャの文化的景観と生物多様性について紹介をするには、イタリア文化における「paessagio:景観」という言葉の重要性に立ち戻らなければいけません。19世紀には、自然景観の考えから、絵画から抽出した美的経験の場として、ヨーロッパの伝統的な景観へのアプローチが指示されました。景観の概念は生態系という概念と緊密に関連していますが、同時に大きなスケールへの解釈にも関連します。大きなスケールによる自然景観については、遅くともローマ時代初期から環境に人の手が入り、自然景観は時を経るにつれ大きく変わりました。つまり、イタリアの景観はその地域に住む人による労働作業の結果なのです。景観は自然なものというより文化の移り変わりの成果物と考えた方が適切です。

イタリアでは、大きなスケールや小さなスケールの両方の景観において、地理・形態学と生物文化多様性との関連性が強くうかがえます。大きなスケールの景観についてみると、イタリア北部のエミリア・ロマーニャ地方に位置するボローニャは「エミリア街道」という、ローマ人が紀元前187年に建設した街道沿いにあります。その全域はローマ人によって奪還され、入植者に土地を配分できるよう道路網や水路網を利用して分割されました。このチェントリアツツィオーネ (centuriazione) と呼ばれるシステムは、エミリア・ロマーニャ地方の景観と都市移住のパターンの基礎となりました。

今日、アペニン山脈に存在する多くの森林は中世から移住した修道僧によって植えられました。都市の建築用材木を森林から供給しなければならなかったからです。一見自然に見えても、景観は人工的であり、人間の存在はとても濃いものなのです。生物多様性と文

化多様性は表裏一体なのです。この密接な関連性は、地方の景観の中で構築された環境の物理形態と共にその環境に住む人々の生き方として表れます。それがその町や土地の最も色濃く、深いアイデンティティなのではないでしょうか。

2. ボローニャの文化的景観

ボローニャは39万人の人口を有する歴史的な都市で北に平地があり、南に丘や山があります。歴史的な中心地が様々な役割を担い、大都市としても地域的な規模としても魅力があるため、重要な拠点となっています。ボローニャはレーノ川とサヴェナ川の2本の川の間位置しています。この2本の川が、衛生と防衛、製造、そして航行の目的で使われた運河のネットワークの支柱になっていきました。中世の自治体の権力者は、巨大な水門や水圧を利用した水車、洗濯場、貯水池、噴水などの人工物を利用することで、徐々に川を開発しました。60km以上つづく運河は19世紀以降に暗渠化されて現在は下水に使用されています。そのため見えなくなっていますが、今日でもボローニャは「水のまち」であると言えます。

ボローニャは地方の美しい風景を生み出している平野と丘の間にあるため、「農業のまち」であるとも考えられます。多くの市場や有名な食文化により、市内の農業の存在はとて力強く、手に取るように感じられます。FICO プロジェクトのおかげで、それはさらに現実味を帯びたものとなっています。FICO とは「イタリアの農家」という言葉の略語ですが、食べ物と農業のためのすばらしいテーマパークとなり、ボローニャだけでなく、周辺地域全体の食文化の価値向上に繋がることでしょう。我々は、年間600万人の観光客を予測しており、市の観光事業の強化にもなると考えています。

コミュニティ・ガーデンや都市菜園の存在にとっても、市内の農業は大切です。30haの菜園のうち殆どが公共ですが、私営のものもあり、社会的・環境的な重要な資源を代表しているといえます。地域の水の景観は、都市の緑樹栽培所や公園機関と共に、持続可能な移動、野外活動、観光産業を支持する緑と青のネットワークの支柱となっています。

さらに、ボローニャはイタリアの鉄道と道路網の重要な中心点であり、重要な中心都市です。年間700万人の乗客が利用する国際空港もあります。そのため、過去には商業の拠点や大学拠点として発展しました。ヨーロッパ最古の大学がボローニャにあるのも偶然ではないのです。今日のボローニャでは、毎年8万人以上の学生と200万人の観光客を迎えています。そのため、まちはとても生き生きとしていると同時に、特に歴史的な中心地などの公共空間において、真の「消費」を生み出しているといえるでしょう。

3. 保護・保全・価値付け

文化的景観については、物理的要素だけではなく、社会経済制度や文化・学校制度、民間の伝統といった非物理要素についての深い知識も必要です。それらは活動の枠組みや政策の骨組みの土台となるからです。イタリアの憲法では景観は国の財産とみなされ、景観と文化的遺産に関する法律では範囲内の物理的要素が保護されています。政府や地方自治体によって保護されている領域や建築物は、地方計画の中ですべてマッピングされています。

遺産保護は保全、継続的な手入れ、もしくは修復をすることです。「修復」の分野はとても幅広く、様々な解釈の仕方があるでしょう。単なる清掃やメンテナンス、新たな建築物の導入、さらには建物の破壊された部分の修復には違いを区別するために異なる材料を使用することもあります。また法律では、修復や改修の際に地震対策が必要とされています。

遺産の適切な保全や価値づけのために民間の排水溝を遮断し新たな下水を作るという非常に複雑な計画に直面している水系が一例です。このような活動の中で、市当局はボローニャとフェッラーラを自転車専用道路で繋ぐべく、さらに広い領域で水系沿いの自転車専用道路の維持と推進に努めています。同時に、地方適応計画という気候変動に挑戦する計画もあり、市内の水循環の管理も試みています。このように、保護と強化政策そして価値付けのための政策はしばしば同時に遂行され、お互いに利益を与え合っているのです。

4. 歴史的中心地計画

文化的景観に関して最も関連性のある政策の一つは歴史中心地計画です。最初の歴史中心地計画は、歴史的中心地に対する保全のための決定が下された1969年に遡ります。この段階では、計画家は住宅建築物に焦点を当てていました。物理的環境と都市景観を維持することが目的だったのです。車の交通の課題も関連してくるようになり、1967年の初の歩行者専用区域から1984年の交通計画にかけ車の交通量を削減する政策が強化され続けました。保全は建物の形状や外観に関心をおきますが、新たな内部構造には地震に対する耐久性を与えるものもあります。また、この考え方は、物理的だけでなく社会的でもありました。古代の都市と同じ人口を保つため、市当局は歴史中心地内の改良地区に低所得者と手工芸の活動をもちこみ、歴史的中心地に社会的住宅地区を作ったのです。

90年代の第二段階になると、保全と価値付けに関する政策が、住宅地区や住民施設から、大学や文化活動などの新たな拠点として国内外の人々誘致する新しい都市の建築へと移行しました。最も重要なのはマニファットゥーラ・デッラ・アルティ：以前タバコ製造会社と公営食肉処理場、そして博物館がある大きな公共の製パン所、公園、大学、など多くの文化施設があった広大な文化エリアです。この地域でもうひとつとても顕著なテーマは農

業です。アースマーケットと呼ばれる重要なファーマーズ・マーケットが毎週開かれます。

2007年の新規地方自治構造計画を皮切りに始まった第三段階では、焦点が建築物から公共空間へと移行しました。特にエミリア街道沿いの歴史的集落と歴史的街道の公共空間の改善が進められました。2011年のディ・ヌオーヴォ・イン・チェントロ・プログラムでは、歩行者の都市利用を最優先することが確認されました。歴史的な中心地へアクセスする車の台数が削減され、毎週末には、ウゴ・バッシ街道とインディペンデンザ街道という大きな二本の商業道に成形された「T地域」を暫定的に歩行者専用道路にするという「Tデー」が制定されたのです。このようなプログラムを通して、市当局は多くの公共空間を改修する機会を得ています。歴史的な中心地は以前より住みよく快適になりました。公共空間を快適にするためには緑がとても大切で、我々は緑化改善をすることにしました。市役所にあるコルティエーレ・デル・ポッツは良い例のひとつです。

我々は力強い保全活動という観点から、歴史的な中心地の「統合管理」という第四段階に入ろうとしています。すでに歴史的な中心地が使い切られていることは認識しています。公共空間はそれを使用する人によっては、いさかいの領域だとみなされることもあります。住民は駐車場や静かな境界、施設を望んでいます。商業を営む人は、公共空間を市場やイベントのために使用したいと思っています。観光客は広い歩行者専用区域のあるバーやレストラン、テーブルやイベントが好ましいと思っています。集中して学生がいる場所は他の使用者が利用できなくしている場合もあります。それゆえに、市の文化的景観、特に歴史的な中心地がそれであるためには、公共空間の変容と占有期間のためのルールを定義し、共有しなければなりません。

ボローニャでは通常、協力的な手段や参加的手段がとられます。人々をシステムに向かわせるのではなく、我々は価値を人々に届けなければいけないのです。これが我々の政策の目標の一つです。今年5月から7月にかけて住民を含めて70回以上の公開集会を開き、我々の公共空間や歴史的な中心地、色々な地区の新施設や他の事項に関する政策について議論をしました。我々が景観に対して取ってきたひとつひとつの活動——つまり物理的な面に限らず、個人個人の存在、人々の複雑な関わり合い、そして人間と環境の関係にも対応する活動——の本質を喚起させる課題、これが我々の現在の課題なのです。

**研究発表3 「金沢市の文化的景観におけるレジリエンスとサステナビリティ
卯辰山麓・東山ひがし保存地区と心蓮社庭園の事例」**
Juan Pastor Ivars (いしかわ・かなざわオペレーティング・ユニット 研究員)

人間と自然の相互作用の結果、金沢市には多くの都市文化があります。例えば、主計町茶屋街または兼六園、卯辰山麓と心蓮社などです。これらは金沢の文化や自然の代表であり、それらは都市の河川、用水、樹木と一緒に生態学的ネットワークを形成する文化的および自然的資産として共に考えなければなりません。モデルとなる事例として、私は、卯辰山麓とひがし茶屋街の生態系と社会システムを評価しています。

この場所が建設される前の様子を想像してみてください。平野に達する多くの丘。その中で小さな川が流れていました。水田は、この土地の最初の農村部を作り出していました。17世紀初期になると自然の地形に沿ってこの場所に寺院がつけられました。19世紀初頭、茶屋街が建設され、伝統的な日本の家、町家を集めて意識的な都市部が使われています。その後、20世紀には、住宅の建物によって谷の前の平野が占められました。ランドスケープのアプローチによって社会のインテリジェンスを測定できます。したがって、この場所に新しいものを提案するときには、私たちは景観のアプローチを取らなければならないのです。

世界に直面している主要なグローバルな課題を見てみましょう。第一に気候変動は、熱島による都市を中心に地球温暖化を引き起こすことが予想されます。これは、より多くのエネルギー消費、より多くの汚染された空気と水、およびより悪い生活の質を必要とします。第二に、歴史的な地域を悪化させ、伝統的な機能や人口を変容させ圧力をかけるマス・ツーリズムです。地元の人々は観光客と接していないように感じます。最後に、都市の縮小です。人口の減少は日本の都市に大きな影響を与えています。その結果、放棄された家屋や空地は増え続けています。

地球規模の問題に取り組むために、国連は加盟国によって実施される規制を制定しています。これらの規則すべてにおいて、2つの用語は常に「持続可能性」と「弾力性」について繰り返されています。持続可能性は既存資源の使用効率です。弾力性は自然の原因だけでなく社会的なものによっても、変化に対処する能力です。したがって、我々は持続可能で弾力のある文化的景観を創造しなければならないのです。

卯辰山麓とひがし茶屋街が形成する生態系・社会システムの強みと脆弱性の評価について、強みの面をみると、周辺の山々の生物多様性がこれらの近隣に広がっています。社会レベルでは、この場所は高いオーセンシティがみられます。茶屋街の芸姑や卯辰山麓の僧侶によって象徴される、保存された建物の品質、創造性、工芸品、文化的多様性のためです。これらは、マスツーリズムとは異なるオルタナティブな観光を引き付けます。

脆弱性に関しては、その地域は火災の危険性があります。社会レベルでは、卯辰山麓が直面している主な問題は高齢化です（30歳未満がわずか18%で、65歳以上が42%）。ここには金沢の空き家と空地が集中しています。これまでに実施された調査によると、2012～16

年には 266 人の人口が減少し、47 世帯が削減され、61 のオープンスペースと 16 の空き家になっている伝統的な建物が存在したことが示されています。ひがし茶屋街については、今日の最大の問題は、マスツーリズムによってもたらされる圧力であり、一般的に市民の間ではほとんど意識されておらず、行動が不足しています。この地域には、既存の規制を補完する再生計画が欠けています。これらの地域の持続可能性と弾力性を高める必要があります。

現在の学問的および政治的議論では、グリーン・インフラストラクチャーの創造が提案されています。コミュニティの環境、社会、経済的ニーズを満たすために計画された多機能緑地ネットワークです。生きた緑地を強化するための緑のインフラの原則は次のとおりです。

- ・ 本来の樹種を選択することで、日陰と都市の生物多様性のための緑被地を増やす
- ・ できるだけ多くの雨水を保つためにレインガーデンと浸透性舗装を導入する
- ・ 壁面緑化と緑の屋根の機会を最大限にする
- ・ 不浸透性表面を最小限にして、雨水の流出量を減らす

グリーン・インフラストラクチャーの利点は次のとおりです。1) 生物多様性の拡大、2) 冷却機能による気候修正、3) 大気汚染、温室効果ガス排出量、エネルギーコストの削減、4) 資産価値の増加、5) 人間の幸福とコミュニティの結束。

卯辰山麓とひがし茶屋街の保存地区に空間的および社会的品質を向上させるグリーン・インフラストラクチャーを構築すれば、空き家や空地の問題を解決し、気候変動に起因する問題を緩和するでしょう。

第二の行動は、その地域でエコツーリズムを行うことです。私たちはその地域でパイロット事業を行っています。私たちは、「心の道」という道を心蓮社の庭園まで歩いて行きます。この庭園には 400 年以上の歴史があり、人間の創造がいかにして自然になるかという例になります。金沢の庭園の保存について話し合い、知識を深めるために、心蓮社の庭園のセミナーも開催しました。私たちはプラットフォームを作るためにこのような行動を続けることが非常に重要であると結論付けました。私たちは次世代のための庭園の保全を保証したいと考えています。

私たちは、物理的で建設的なもの、社会経済的なもの、生態学的なもの 3 つのサブシステムで構成された都市システムにいます。それぞれに独自のアクター、プロセス、およびリンクがあります。したがって、私たちは複雑なシステムにあり、柔軟な考え方が必要です。

卯辰山麓とひがし茶屋街の区域は 20 以上のブロックに分割されています。未成年者は自らの規制に署名し、市議会に直接代表を置いています。私が間違っていなければ、残りは

それを持っていません。規制の問題ではなく、何か異なる行動計画を作成することが重要です。私たちは、これらの代表者と市民を集めて一緒に解決策を見つける必要があります。このように、この場所の持続可能性と弾力性を高めるためには下記が必要です。

1) 接続性を管理する, 2) 学習を奨励する, 3) 参加する, 4) 多角的ガバナンスを促進する, 5) パートナーシップを構築する。小さな行動から大きな行動に行動して始める必要があります。私が示してきたこのチャレンジとチャンスは、私たちがこの分野の未来を支配できると考えて自分自身を刺激しなければなりません。

研究発表 4 「ものづくりの文化多様性」

丸谷 耕太（金沢大学 助教）

1. 伝統工芸と自然のつながり

私が研究のフィールドとしていた小鹿田焼は、九州の大分県で、昔からの作り方で今でも焼かれています。土を採って、それを砕いて粘土にします。それから形を作って、炎で焼いて、焼き物にする、その際には、地域のさまざまな自然を利用します。

小鹿田の集落は全部で10軒、ほとんどが焼き物屋で、ここに住まわれて生産をしています。例えば、地域にある土。もちろん焼き物の原材料は土ですので、土をその地域で採るということは、すごく重要です。それから水も重要です。水は釉薬などに混ぜて使うこともあります。この地域では、水力による唐臼という機械を用いて土を細かくします。そして登り窯は熱を上に向けているので、斜面が必要になります。木を燃やして熱をつくるので木も必要になります。

焼き物以外でも、さまざまな自然との関係が、ものづくりの中ではあります。例えば木は乾かすために天日で乾かしますが、外の湿度が高くて室内で乾かさないといけない地域では屋根の下で乾かすというように、この関係性も場所ごとに異なります。着物を黒く染めるときには、泥沼に反物を漬けて、その鉄分で黒くします。沼はいろいろなところにあるのですが、それぞれ性質が違うので、漬ける場所によって黒さが違うという、そういう違いも出てきます。金沢だと友禅流しといって、染色をしたときに川で洗い流します。

このように、ものづくりというのは、地域の自然をたくさん利用しています。そして、その地域ごとにいろいろ違うのだということが分かるかと思います。

2. 文化の伝播と技法

そもそも伝統工芸、工芸品がその地域で作られた時代、その要因をオリジナリティとし

て調べました。日本の伝統工芸 143 種を調べたところ、その場所から発生した伝統工芸は、143 種のうちの 40 種で、それ以外は、外から技術・技法が伝わって、そこで作られ始めました。主に人が移動してきたことで伝わりました。江戸時代には産業生産のために、藩主の人たちが職人を呼び寄せました。このような人の移動で、その地域で産業が起こるといふことが多いのです。

それぞれ移動した先で、気候の違いなどから、新しい織物だったり、焼き物だったり、その地域ならではのモノが生まれるわけです。産地が形成されてから現在までの変化について工芸品を通じて調べると、その気候とのつながり・関係性が、大きく失われていることが分かりました。112 カ所の産地において、もともと関係ない、もともとその気候に基づいた技法、技を使っていないところは 34 カ所あり、これは都市部で多いです。家の中でできる作業、あるいは外から原材料を持ってきて作ることができる産業などもあります。しかし、だんだんその関係は希薄しています。特に、実際に川に入ったり、山に登ったり、実際に外で、その場所で作業するという事は減ってきています。

なぜかという、例えば川で染色をしたら川が汚れてしまうということで禁止になったり、機械を導入することで室内での作業ができるようになったりします。あるいは染色の場合、漂白剤のような代替品を使います。伝統工芸を見ても、徐々にものづくりと自然の関係がなくなるものが多々あります。ただ、最近は伝統工芸の地域性、その場所の原材料、あるいはその場所で作ることがとても大事だということが認識されてきていて、全国各地にいろいろなプロジェクトがあります。

3. 文化の醸成

金沢は、やはり都市部ですので、自然との関係があまり多くない産業が多いのですが、それでも、いろいろな産業がたくさんあることが特徴かと思います。そして、自然に基づく多様性にプラスして、江戸時代から何百年も続いていくことで、消費地の性質、加賀の人、金沢の人の住まい方、暮らし方に合ったものによって変わっていきます。漆や仏壇、着物というものも、金沢らしいものによって変わっていきます。

職人を養成する学校も金沢にはたくさんありまして、若い人たちがいろいろなチャレンジを行うことができる環境も整っています。21 世紀美術館は、外に開いて、地元の人たちの文化、あるいは文化に対する意識も同時に育成しながら、新しいものを取り入れることで、金沢の文化をさらに深め、高めようとする活動もしています。

視察で参加した、金沢クリエイティブツーリズムという、金沢の職人・作家の工場を回りながら、もう一度、金沢の町にどのような文化があるのか知ってもらおうという取り組みもあります。観光客に、有名な観光地に行くだけではなく、もっと地域の暮らしを見て

もらい、金沢をもっと知ってほしいという活動です。

4. 観光と文化の理解

このように見てみると、文化、ものづくりの伝統工芸というのは、自然と一体となっているということが分かります。人が移動することによって、新しい土地に、また新しい文化と自然の関係が生まれます。ということは、伝統工芸の場合、技術、技法というものが人の中にあるので、人が移動すると、文化と一緒に移動していきます。そこで、その場所の新しい自然との関係が生まれていきます。そうすると、元の場所の流れと移動先での流れでは、自然が異なるので、違う関係性が生まれていきます。これが文化の多様性を生んでいるのではないかと考えています。

そして観光から見てみると、この時間をさかのぼって見ることができます。昔はどうだったのかというのを、その技が残っていることで、昔の状況を知ることができます。あるいは、伝播した関係です。他の産地の関係も見ることができると考えています。文化的な景観というのは、地域を知ることがすごく大事なのですが、もっと広い可能性、時間を超え場所を超えたつながりというものが見えるのではないかと考えています。

セッション2のまとめ

Valentina Orioli (ボローニャ大学 准教授)

とても内容の濃い興味深い発表で、まずは場所の形態と地形、発祥の理由、そして入植が時を経るにつれてどのように発展したかを理解することが重要であるかについて指摘されていました。この観点から言うと、丸谷先生が示してくれたように、自然資源が重要な役割を担っていると思います。なぜなら、自然資源が工芸品とその生産の土台を提供してくれるからです。長年にわたって、自然資源が町の生活の土台そのものであったのです。これは忘れないようにしましょう。

フアンさんの発表の中で、文化と自然が繰り返し対立しているのを目にしました。この対立関係は発表の中では機能を果たしていたと思いますが、我々のデザインを考えるという仕事の中では、町をもっと統合的な視点から捉えることが必要かも知れません。従って、ヨーコム先生が最初に主張された、全ての要素の関連性を考慮した幅広い生態学に対する方法を取らなければならない、という内容に立ち戻ります。フアンさんはこの方法を実践しようとしたと私は確信しています。でもそれと同時に人工的なもの、例えば町とか建築物、それからもっと自然的なもの——例えば庭園——についても言及したかったのだと思

います。ですから、金沢の地域の特徴について説明するには良い方法だったのではないのでしょうか。

では、グローバルの問題を地元の共同体の中でどのように取り扱えばよいのか、グリーンなインフラをどのように造れるのか、どのようにして伝統工芸に価値を与えればよいのか、もしくは、再度言いますが、どのようにすればエコツーリズムを向上できるのでしょうか。これらはすべてとても大きな課題です。たくさん手段はあると思いますが、まずは資源としての人々が手段であると思います。なぜなら回復力の強化に繋がる持続可能な解決法を通して、人々自身が問題提起できるからです。だからといって、人々自身では何も出来ません。これはとても明白です。地元の共同体を関与させることが必要であり、非常に大切だと思います。例えば、まるやま組のコミュニティ、もしくは昨日我々が訪れた寺院や庭園のコミュニティをどのようにすればエコツーリズムに開けるのか、と自問できるでしょう。

コミュニティはとても大切です。コミュニティは活動を改善する基礎です。しかし、コミュニティは小さい活動をします。我々はこれらの活動の規模を拡大しなければいけません。私は地方政府がこの拡大には主要的役割を担っていると思います。なぜなら、彼らこそ地元の政策（例えばクリエイティブな地元政策）と、政府の政策や国連の持続可能な開発目標等のもっと一般的目標とを結び付けるからです。彼らが接点であり、それと同時に融合の場所でもあると思います。ですので、お見せいただいたプロジェクトは、例えば金沢市の戦略的ビジョンというような一般的なビジョンにおいて融合化されなければならないと思います。地方政府がすべての地元の活動、すべての地元の資源、そしてこの一般的なビジョンにおけるプロジェクトを融合化する役目を負っていると思います。従って、これらすべての施策を一貫した政策枠組みの中に盛り込まなければいけないと考えます。

<Session 3> 金沢・石川における自然と文化 Nature and Culture in Kanazawa and Ishikawa

招待講演 3

「金沢・能登に観るエコロジカル・デモクラシー」

土肥 真人（東京工業大学 准教授）

1. 自己紹介：エコデモ名刺

私たちはビジネスカードに対して、エコデモ名刺というものを作っています。表がエコ

ロジー・サイドで、自分がどの川の近くに住んでいるかを示しています。裏面はデモクラシーサイドで、自分の住むまちの都市宣言や市民憲章から選んだ一節が載せてあります。市民としての自分の位置を示す名刺です。

エコロジーサイドは分水嶺によるバイオリージョンの考え方に基づいています。海から水が蒸発して、雲になって、山に当たって雨になって落ちる。表面流は川になって、地下水は伏流し吹き出したりする。大きな水の循環が陸にもあり、その中のどこかに私たちはいます。私たちはその水を飲みます。野菜や動物を食べると、その水分が体の中に入って出ていきます。近代的な生活をしていても、私たちは水の循環の中にいるのです。

これは私が選んだ自分のまちの市民憲章です。世田谷区には、平和都市宣言、子ども・子育て応援都市宣言、健康都市宣言等々があります。この中から、平和都市宣言の中の冒頭の、「核兵器のない、戦争のない平和を実現していく」という一節を、自分のエコデモ名刺に入れました。私はこれを読んで、世田谷区民であることを誇りに思うのです。

2. エコロジカル・デモクラシーとは？

エコロジカル・デモクラシーについては Randolph Hester 氏の『Design for Ecological Democracy』という本に書かれています。私はこれを翻訳して、2018年4月に鹿島出版会から刊行されます。日本でも、自然と社会の連動を進めるために、昨年エコロジカル・デモクラシー財団を設立しました。

自然と社会の両方を、その場所に根付くように一生懸命考えること、組み合わせてみること、そして行動し、事態を動かして世界を構成し直す。自分の周りの世界も、世界中、文字どおり地球という意味でも、自然と社会の関係を再構成します。活動、実践されている方法、生み出されている価値、それを支える根拠、思想を、全部エコロジカル・デモクラシーと呼びます。「自然を直そうとすると、同時に社会が治る。社会を直そうとすると、自然が治る。」最近一番伝わるなと思う言葉がこれです。例えば間伐をしなければいけない森に入るときに市民参加でやる。すると、市民は森のサイクルを知り、生物を知り、水の循環を知り、林業も知ることになります。一緒に活動すると友達もでき、交流が始まるかもしれません。このようなことはそこら中であって、非常に重要なことだというのが、エコロジカル・デモクラシーの考え方です。

民主主義は一人一人の自由を保障できる唯一の政治体制です。しかし行き過ぎて無制限の自由になると、孤立やエゴ、無責任を引き起こします。それに対して、私たちは自然の一部であり社会の一部であることを知る事で対抗できるのではないのでしょうか。私たちはどこかの水を飲み、どこかの町に住んでいます。隣の人と支え合って生きています。これを知り暮らしに組み込むことが、個人の責任ある自由をさらに進め、喜びを増し、社会と

自然を持続可能にするために必要だと、エコデモは教えてくれます。見る目を持つてみると、どこでもかしこでもエコデモが見えるということです。エコデモは、ここでも、そこでも、どこでも、どこにでも、いつでも、誰でも、なんだと思っています。

3. 金沢・能登でエコデモを探す

今回のエクスカッションに用意した道具が、エコデモ発見シート（エコロジカル・デモクラシー発見シート）です。項目にそれぞれ「文化多様性」「ランドスケープ」「生物多様性」と書いてあります。訪問先で見えたもの、聞いたことを、ここに分類して書いていきます。その場所に行ってみても意外と何も見えていません。活動されている方に話を聞いて、エコデモと一緒に発見してもらおうのです。例えば、何か社会のことに気が付けば書き、見えた風景をランドスケープの欄に記す。そして両者の間に何か関係があるのではないかと、さらに社会やランドスケープに対応する自然の事象はないか探してみます。そうすると新たな発見があります。どう考えても思い付かない場合は、実際に何かを付け足せばいいのではないかと考える。そのような思考のための道具です。

今回は能登の3カ所を26名の方と、金沢の3カ所を18名の方と一緒に回り、情報の詰まった90枚のエコデモ発見シートが手元にあります。今日の発表までにこれをきれいにまとめるのは無理でした。エコデモの発見は、皆さんの90枚を並べてみて、自然と社会とランドスケープを結ぶ回路を見ていきます。そして見つかった回路をもう一度、事業を展開している人と一緒に、その事業の中にエコデモを発見するのが基本です。ですから、これからご説明するのはエコデモ発見の途中です。

1カ所だけ話してみます。Juanさんが紹介してくれた、卯辰山の山麓の伝建地区の心蓮社というお寺と庭の話です。例えば「Juanさんが、あの庭に行って縁側に座っていると、何時間でもそこに座ってられる、時間が過ぎるのを忘れてずっといられると言っていた」、「庭はやさしく穏やかで、Juanさんと自然との境界となり、自然の入り口になっているのではないか、庭というランドスケープが入り口になっているのではないか」と書かれています。庭は本当に美しい風景で、光が水面に当たってアメンボが動くときらきら水面が動くのです。リフレクションの光が石灯籠に当たって映っています。時間がたつと、今度はタブの木の幹にも映って、きらきらする。奇跡のような自然の美しさを見る人が自然と一体となる瞬間であり、庭が自然の入り口であり、同時に自分への入り口でもあるだろうと気が付きます。別のシートでは、「Juanさんが光を感じている。Kennethさんも Orioliさんもずっと見ている。だから、文化の違いを超えて庭と水面と光の反射は自然への入り口になる」と書かれました。東京から来た者も、若い学生も、みんな見とれているランドスケープがある。文化の多様性を超えた自然への合一が風景に現れているという発見です。

今回の心蓮社の庭のエコデモ発見では、社会-ランドスケープ-自然の関係は、三つにまとめられました。池は心字池といって、「心」という漢字をかたどっています。自然そのものには心はないのだけでも、人がそこに心を入れることで、自然に文化が入っていきます。そして山の上からは常に自然の側が、庭を自然に戻そうとします。人間はそれをメンテナンスすることで、自然の入り口を維持し続けようとしています。ですから、自然と人間の文化のせめぎ合いと言ってもいいし、両方ともが重なっている場所だとも言えると思います。

ここには素晴らしいエコロジカルな社会、文化とエコロジーの接点があります。それだけだと「なるほどね」です。心蓮社は東山の麓にあって水が湧き出しています。後ろは山の名所で浅野川を挟んで寺を置くという、おそらく政治的な力でできた寺町です。ですが、心蓮社が自然の入り口ならば、そこにたくさんあるお寺はすべてそうなのではないでしょうか。寺町の全体は、自然がまちに出てきているところで、逆に文化が自然の中へ出ていくところでもあり、自然と自分と合一するポテンシャルが発揮される場所ではないかと思っています。

一方、観光地化された東山はとても自然との接点とは思えないし、社会との接点ともなかなか思えません。私ならば、庭を通してそこには自然が来ている、われわれ人間の文化が重なる、ポテンシャルが非常に高い場所として位置付け直すと思います。お寺は開いていないから入ったことはないけれども素晴らしいところがきっとたくさんあるのでしょう。そして庭々とそこに至るまでの東山地区なども位置付け直してみたらどうだろうと思います。

文化の多様性という意味では、お寺の格天井に絵があるのですが、これもいろいろな市民の方が描いたそうです。真ん中は九谷の絵付けのすごい人が描いたと聞きました。真ん中には素晴らしいランドスケープとしての庭があります。コケがむしたり、モリアオガエルが来て卵を産んだり、そういうことが繰り返し起こっています。そのような風景が自分への入り口になり、僕たちは自然と合一し、そういう場所だと知るのでしょう。

4. 生物・文化的多様性とランドスケープ：エコデモ発見シートから

一般に生物多様性と言えば、エコデモ発見シートの自然の欄だけの話です。どれほどの生物がこの範囲にいるのか、それから社会・文化の欄をみて、どれだけ多様性があるのか、別々に話してします。しかし自然と文化が一つであって、分けることがもともと考えられません。ですから、生物文化多様性あるいは景観の多様性というのは、ランドスケープを媒介にしたセットとして多様なのです。ある場所の自然と文化のつながり方は別の場所のそれとは違うし、ランドスケープとのつながり方も違うというのが、私が思う生物文化多

様性です。結構革命的な、画期的なことで、場所に根付かせて、自然と文化を考えてみるということ、これはグローバリズムや物や情報や人が移動を自由にする社会の中で、どのように社会全体を、世界全体を再構成するのかという大きな問題の一部なのです。

もう一つ、例えば金沢の真ん中でのクリエイティブツーリズムでのエコデモ発見シートに、エコロジーがあまり書かれませんでした。「これは、どうしてだろう。この欄には何もなくていいのかな。いやいや、あるとしたら、何がどのようにありえるだろう」と考えることは実り豊かなことを生み出すはずで、それがエコロジカル・デモクラシーの方法であり思想なのだと、私は言いたいのです。発見される一つひとつの事象が素晴らしいのだから、どんどん発見しなければいけないし、でももしも自然と文化が連動していなければ、それを直し治す方法を考えるのがエコデモなのです。エコロジーと社会の関係をみんなで考える、そんなデモクラシーが実践できるのです。

エコロジーとデモクラシーが、両方とも場所に根付くように考えて、組み合わせ、動かして、世界を再構成する活動、方法、価値、思想。それらは、ただ情報を集めてアーカイブするものではなく、誇りにすべきことです。美しい社会関係と美しい自然との関係、必ずしも私たちには美しく見えないかもしれませんが、それが美しいランドスケープを生んでいるとすれば、そこには学ばねばならない「何か」があるのです。エコロジカル・デモクラシーは本当にそこら中にありますし、それが持っている可能性を確認できるのです。

研究発表5「地域再活性化の機会：障害を持つ人々のケアを通して学んだ教訓」

Mammadova Aida（金沢大学 特任助教）

1. 生物・文化保護のための教育現場

自然や文化活動では、私は主に人体の五感を使用しています。私たちは自然をどのように認識し、その認識を文化の創造にどのように使うことができるのでしょうか？コミュニティベースの学習は、生徒が主に日常生活の中で地域の人々を支援するボランティア活動でした。場所固有の学習は、私たちは主にその地域に関連した科目であることを重視しました。創造的なエコツーリズムの場所では、学生自身が訪問したいフィールドと地域や街の中でどのようなものを見たいのかを見つけなければなりません。私は学生が観光や経済的な場所に関係のない何か新しいことを体験するために新しいことを行いたいと思い、私は福祉に関する科目を作ることにしました。

福祉と農業を通して学ぶ新しいアプローチにおいて、非常に有益な結果をもたらし、地域の問題や社会問題に深く関わっていくよう学生に促しました。皆さまの周囲に障害のあ

る人はいますでしょうか？彼らと話をしたことがありますでしょうか？ご存知のように、世界中の人口の 15%が障害のある人です。社会での彼らの役割を強調し、無視してはいけません。障害とは人に対する差別です。それは社会の平等を不均衡にします。それは私たちの差別です。

科学的な研究によると、自然なリズムと農業生活、肉体的作業によって、治癒効果もたらされることが証明されています。いくつかの研究では、動物や樹木との五感によるコミュニケーションを用いて自然に耳を傾けると、コミュニケーション障害のある子供たちの心がより創造的になり、コミュニケーションをとる方法を学び始めることが示されています。

2. 金沢における農業+福祉農場

では、金沢にはどのようなフィールドワークの場があるか調査したところ、障害を持つ人々を農場に連れて行った病院は数多くありましたが、地域の活性化に実質的な影響はない、または栽培できる土地を提供しているだけでした。地域の問題に関連した新しいものを検索しましたが、2つしか見つかりませんでした。1つは「金沢ちはらファーム」、もう1つは「REHAS FARM」です。これら2つの農場の違いを紹介します。

「金沢ちはらファーム」は私有の農場でビジネスマンである人が所有しています。彼はアスペルガーの息子のために活動を始めました。彼は製薬会社を経営する薬剤師で農業の背景がありません。多大な苦勞の末に金沢市にある湯涌近くの放棄された畑を手に入れ、3つの主要なプロジェクトを開始しました。1つは障害者のための雇用の提供、2番目は野菜を究極の補助食品として、化学肥料、農薬など何も使用していないハーブを生産しています。最後は地域活性化です。彼は放棄された農地に多くの人々を引き寄せ、自分の土地を増やしたいと考えています。

ブルーベリーはすべてオーガニックで、アスペルガーの子供たちはこれをすべて掃除しています。有機的な生産をしていると、多くの虫や昆虫が植物に生息するので、すべて手作業で掃除します。ブルーベリーは非常に大きく、非常においしく、マーケットの外でそれを販売されています。

2つ目の農場は「REHAS FARM」です。これは実際には Creators Inc. Company に所属するリハビリファームです。彼らは障害者のための雇用の提供し、4つの柱で事業機会を創出する。一つはデザインと創造性です。二番目は清掃、清掃は障害者が金沢市を清掃して街を清掃していることを意味します。第三、第四は食料と農業ですが、これらは専門の作業療法士と協力しています。彼らは能登半島のアテの木から作られたカードを作成し、障害者にもいくつかの仕事が提供され、非常に良い影響をもたらしています。ハーブ栽培では、

彼らは「ハーブ農園ペザン」という河北潟にある大きな農場にハーブを植えています。ハーブとパッケージングは、すべて障害者によって行われています。

3. 結論

私たちは障害者や主催者とのコミュニケーションの結果をまとめました。大きな農業景観は人々の健康を回復するのに役立ちます。それは知られている事実です。もう一つは、障害者の社会内への統合です。3番目は、障害者の独立性と平等な社会的地位でした。もう一つの機会は、農産物の多様化でした。地元の外部からハーブを持ち込むことができます。ラベンダー、バジル、ミントなどのハーブを植えていますので、商品も多様になります。

また、障害としての欠点で主なものはありません。実際、障害は利点となることもあります。たとえば、パッケージに梱包する際に葉が落ちてしまうと、障害のある人はそれを拾いすべてパッケージに入れます。彼らは仕事にとってもまじめです。もちろん、どのように働くべきかを教えることは最も難しいことですが、その方法を教えられたら信頼することができます。また、障害者を雇用する場合、1時間あたり120円の費用がかかるため、雇用は新たな収入源をもたらすことができます。普通の人を雇うよりも80-90%安く、地域経済を向上させることができます。

私たちが最終的にまとめたのは、特にこれを強調したいのですが、それは里山の地域レクリエーションにとっての大きな可能性です。里山には、高齢化、人口減少、人材不足など、多くの問題があります。実際には、障害者は巨大な労働資源となり、里山問題の若返りと活性化に役立ちます。

SDGsとして、学生が主に集中していたのは8番目の目標でした。若者や障害者を含むすべての女性と男性の完全かつ生産的な雇用と適切な仕事を達成するために、目標8.5に下線が引かれています。SDGsでは、障害の言及はありません。障害の目標はありませんが、経済成長では言及されているので、それについて考えるべきです。彼らは地域経済に多大な貢献をしています。

私たちはすべて生物多様性について語ります。生物多様性は、強い生態系の本質です。文化的多様性、それは強いアイデンティティを創造します。しかし、人々の多様性があることを理解する必要があります。私たちの社会には多くの差別があります。しかし、人間の多様性が、強い社会を創造するために多くの利益をもたらす、もたらすことができることを理解する必要があります。したがって、すべての人に平等な権利を使うべきです。

セッション3のまとめ

土肥 真人（東京工業大学 准教授）

先ほど Aida さんのお話を聞いて、僕が思ったことです。障害は社会的な定義であって、ディスクリミネーションなのだというのは、まったくそのとおりですよ。もうちょっとエコデモ的に見ますと、人間だけが、障害者の人や生殖年齢を過ぎた高齢者の人と一緒に住むことを選んできた「種」です。他の動物たちはそういうことをしません。なぜ人類だけが一緒に暮らすのかというと、その方が生存に有利だったからだと思います。子どもを、もう子どもを産まないおじいさん、おばあさんに預けて、お父さん、お母さんは外に餌を探しに行くというのが有利だった。あるいは、障害があり歩けない人を背中におぶって歩いていく大変さよりも、その人が持っている知識の方がはるかに価値があると、昔の人は考えました。これが人類の「種」としての生き残り戦略だとすると、それが人間の自然、人間が持っている共感するという能力になったということです。近代になりこれらの人の内に培われてきた自然は、近代的自我、確立した個人という前提の中で抑圧されていたけれども、それが現代になりもう一度戻っているように、僕には見えるのです。アイダさんの話はもちろんソーシャルジャスティスの話でもあるのですが、それ以上、人間の本質に触れる話だと思うのです。

それから、農場に現れている風景。障害者の方が、手で虫を捕って、一緒に働いている。その風景は本当に、考えれば考えるほどブライストレスですよ。その畑と、そのブルーベリーを売って、皆が食べる場所までの風景を全部考えてみる。それは美しいのです。ランドスケープに美しく映る社会的な関係があり、生産の方法があるのです。このようなランドスケープを美しいと思い、その理由をしつこく考えてランドスケープという鏡に映った社会を創っていくことが、大事だと思います。美しいし、楽しいしという。それは支え合うことの、人間という種として持っている、自然なのだと思います。

総括

佐々木 雅幸（同志社大学 教授）

私は 1985 年から 2000 年まで金沢大学にいました。バブル経済がひどくなり全国的に

乱開発が進んだ時期で、石川県内にもゴルフ場が10ぐらい新たに造られるという話がありました。日本のゴルフ場では大量に農薬をまくため、あちこちで反対運動が起きました。

一番有名なのは手取川の水源の上にゴルフ場を造るという白山麓ゴルフ場騒動でした。水道水に影響が出るため、作家の高橋治さんと一緒に止めました。輪島の三井地区の中に造るという話もありました。輪島市議会で賛成派・反対派が議論することになり、賛成派を論破しました。三井地区で、今日お話が出たような集落の小規模な自然との循環の維持は、そういう流れの中で出てきたものです。今年の秋に奥能登国際芸術祭が展開されます。そこも原子力発電所の2機目ができる話がありました。石川県は電力が余っていますが、トヨタ自動車に送るための電力という口実でした。一緒になって止めましたが、地元の建設業者の仕事もいるので、セカンドベストとして能登空港を先に造りました。

エコロジーや環境問題を考えるときは止めるべきものを止めないといけません。輪島の産業廃棄物問題は、小規模な地域の中で循環しているゴミを処理する話ではなく、広域的にゴミを集めてきて処理する施設です。それを地元の方や市長が中心になって誘致せざるを得ない状況に追い込まれている点が問題です。やはり、環境と環境資源と文化資源を生かした地域の内発型産業を発展させなければ、大規模で都会が嫌がる施設を持つてこなければいけません。

内発的発展のモデルとしてポローニャの比較研究がありました。ポローニャは都市景観の取り組みも素晴らしいし、職人企業のネットワーク型の産業組織も素晴らしいし、ソーシャル・キャピタルの中心地です。経済と景観と社会が一体となっていて、それをコムーネがコントロールしています。つまり、地方自治がしっかりしているのです。Orioliさんの話で、最終的に住民の意志をまとめて一体的な構想像を持たなければいけない、生物多様性や文化多様性をまとめるときには、それが地方自治なのだと思います。エコデモというのは、まさにそういうものだと思うのです。

当時は地域の持続的発展と工芸の推進をテーマに研究していました。この地域を代表するものが、手仕事であり工芸だからです。生物多様性と文化多様性は、さまざまな工芸・手仕事によって媒介されますので、この二つのものが生活の中にもつながっていくと考えたわけです。ユネスコ創造都市を進める上で、ポローニャに視察に市長を連れていきました。いろいろなアイデアが出てきました。その前に取り組んだのは世界工芸都市会議です。以降、私は工芸というものを、フォーディズムや大量生産・大量消費の社会の後に来る、より新しい文化的な生産、あるいはネオクラフトイズムと考えています。

現在、金沢市は新しい工芸として「工芸未来派」というのを21世紀美術館で取り組んでいます。工芸館の東京からの移転について知事もそれでいきたいと思います。こ

の地域では、手仕事・工芸を媒介にした、その上に文化的景観が乗ると私は思うのです。そして生物多様性、文化多様性の世界的なモデル地域になることを、今後の研究課題として、皆さんに期待しております。